

九州大学 大学文書館ニュース

第34号

2010. 3. 31

目 次

法文学部85周年/文学部60周年記念事業 について……………2	九州大学大学文書館名簿……………6
大東文化歴史資料館（大東アーカイブス） 設置から百年史編纂へ……………3	大学文書館日誌抄録……………6
九州大学大学文書館委員会名簿……………6	九州大学百年史編集小委員会名簿……………8
	九州大学百年史編集室名簿……………8
	百年史編集室日誌抄録……………8



九州帝国大学正門より法文学部を望む

現在の文科系学部の前身である九州帝国大学法文学部は、大正13年（1924）9月26日、勅令224号をもって設置された。創立委員長は天皇機関説で有名な美濃部達吉。授業開始前日の『福岡日日新聞』は、「西日本文化の新淵叢/九大法文学部生る/幾多俊髦を育くむ揺籃として/幸先多きけふの首途」（大正14年4月20日）と報じている。法文学部の敷地・本館は工学部の西隣りに新たに造られたが、この時、従来斜めに切られていた「正門」は、現在のように道路と平行に直された。写真は法文学部設立まもない頃（昭和初期）のもので、当時の同学部の雰囲気良く伝えている。

法文学部85周年／文学部60周年記念事業について

柴田 篤

1. 節目の年に

2009年（平成21年）、九州大学文学部は節目の年を迎えた。すなわち大正13年（1924年）9月26日、九州帝国大学に法文学部の設立が認可されて85周年、昭和24年に法文学部を廃止して文学部を創設し、翌月に新製の九州大学文学部が誕生してから60周年目となる。この時に当たり、文学部は年度を通して記念事業を行うことにした。その顛末について、ここに少し記録しておきたい。

2. 「箱崎九大記憶保存会」との出会い

九州大学は来年、帝国大学として創設されて百周年を迎える。既に記念事業の準備も開始される。この間、大所帯である工学部の新キャンパスへの移転が行われた。これに伴い、百年近い歴史を持つ箱崎地区の構内もかなり様変わりした。周辺の地域社会にも影響が見られ始めた。

そんな中、2007年（平成19年）8月4日（土）、福岡市博物館で文学部同窓会の総会が開催された。その晩の懇親会に予期せぬ来訪者があった。「箱崎九大記憶保存会」と名乗る数名の学生たち。同窓の先輩たちに、往時の学生生活や箱崎の思い出などを聞かせて欲しいとの申し出で。しばし歓談の時。聞けば、キャンパス大移転の中、今まで九大の学生たちを見守り育てくれた箱崎の町や人々とのつながりについて、様々な形で調査を行い、記憶と記録を保存し、後世に伝えていきたい、とのこと。九大の構成員の一人として、一



「記念祭」での九州大学風景画作品展示
（大学文書館前の廊下がギャラリーに）

撃を食らわされたという思いであった。過去を振り返り、現在を見つめ直し、そして未来への新たな一歩を踏み出していく——記念事業の源泉はこのときの出逢いにあった。

3. 「はごろもプロジェクト」の誕生

2008年（平成20年）の夏にかけて、人文科学研究院長（文学部長） 直属の「研究企画特任チーム」の会合で、文学部が置かれている現状と今後のあり方について、様々な議論がなされた。この中から記念事業の企画がなされ、将来計画委員会に提言。協議の末に承認され、11月15日の文学部教授会への正式提案となり、翌年度に記念事業を行うことが決定した。2009年1月7日の教授会で「記念事業実行委員会」を設置。3月17日に開かれた第2回の会議で、愛称を「はごろもプロジェクト」とすることが決定される。

「8560」と「はごろも」の語呂合わせではあったが、箱崎—松原—羽衣という連想は九大と箱崎との深い結びつきを示している。何より羽衣伝説は私たちに確実なメッセージを伝えている。大切な羽衣を失った天女は、遂にそれを取り戻し、天へと還っていく。文学部につながる私たちも、本当に大切なものは何かということをしつくり考え、それを取り戻し、還るべき所をしっかりと目指して、新たな飛翔を遂げていきたい。ここに「はごろもプロジェクト」の理念があった。

4. 記念事業の展開

記念事業は当初の計画以上に豊かな内容となった。以下、時間軸に順い簡単に列記する。

①「九州大学文学部・朝日カルチャーセンター提携講座」は、従来の文学部公開講座を発展させ、4月から前期に「古今東西 あの世とこの世」、後期に「人はなぜ生きるのか」をテーマに、それぞれ6人の教員によるオムニバス講義がなされた。各講座80人が聴講する。

②「記念祭」と「祝賀会」が、9月19日（土）に文学部同窓会との共催で挙行された。旧工学部本館を会場に、若い卒業生による「講演会」、21世紀交流プラザを舞台に、文学部の研究室有志

による研究活動の紹介（発表・展示・デモンストレーション）がなされたほか、「記憶保存会」制作のビデオ「ありがとう、そしてさようなら六本松」の上映、吉川幸作氏の九州大学風景画作品展示。更にはキャンパス見学会と、実に盛りだくさんの内容であった。なお、この3月には記念祭の1日を記録した『記念誌』が刊行される。

③「九大生AQAプロジェクトによるアジア現代美術展—ただいま」が、9月5日（土）～11月23日（月）、ギャラリーアートリエで開催された。福岡市文化芸術振興財団との共催、福岡トリエンナーレ実行委員会の協力のもと、美学・美術史を学ぶ学生たちの企画・運営により、アジア現代美術の動向を「ただいま」をキーワードに構成した展覧会。学生の学習活動として新聞やテレビで大きく報道された。

④「仙厓展—九州大学文学部所蔵中山森彦コレクション」が、10月3日（土）～11月29日（日）、福岡市美術館との共催により、同美術館で開催された。文学部に寄贈されている中山森彦博士（九大医学部教授）遺愛の仙厓世界。大学と市美との本格的共催による、優れた作品の展覧会として注目された。

⑤「シンポジウム—九州大学所蔵の史資料」が、12月12日（土）に九州史学会との共催により附属図書館で行われた。また併せて同図書館の後援により展示会が行われたほか、13日（日）には日本史部会特別セッションとして「九州帝国大学法文学部の国史学」が講義棟で、同じく共催の形で開催された。百年史や部局史を見据えた試みが、多くの人々の関心を呼んだ。

⑥『創立八十五周年記念論文集』（上下2巻）が、文学部担当専任教員の寄稿により3月に刊行。



「仙厓展」開幕式（於福岡市美術館）

『十周年記念哲学史学文学論文集』（昭和12）、『創立四十周年記念論文集』（昭和41）、『創立五十周年記念論文集』（昭和50）を継ぐものである。

5. 「文学部歴史編纂室」の開設

「はごろもプロジェクト」を通して、伝統の持つ重み、研究・教育の多様性、大学と社会との結びつきなど、今後の文学部のあり方について、多くの示唆を得ることができた。そうした中から、私たちは、文学部の歴史に関する資料を余すところなく蒐集、整理、保管、活用すると共に、将来にわたって自分たちの姿を記録、保存し伝承していくために、「九州大学文学部歴史編纂室」を開設することにした。編纂室の場所は旧工学部本館3階、大学文書館と同じ建物。2010年4月1日、それは、新たなる「はごろも」の旅の始まりを告げる日となる。

末尾ながら、皆様方の更なる御支援と御鞭撻を
お願いして記念事業の御報告といたします。

（九州大学大学院人文科学研究院長・文学部長）

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）設置から百年史編纂へ

浅 沼 薫 奈

2006年4月1日、大東文化学園に「大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）」が設置された。

それに先立つこと約半年前、大東文化大学板橋校舎2号館の入り口に現在も開設されている「展示室」で、「プレ展示」が企画開催された。プレ展示が行われたのは2005年11月のことであり、「アーカイブス開設準備プロジェクトチーム」が

主催しての企画展示であった。

「アーカイブス開設準備プロジェクトチーム」は、多分野に跨る教員数名と総務課事務職員とからなるメンバーで編成された。プレ展示活動以外にも、メンバー全員で日本全国の大学アーカイブスを精力的に見学してまわり、それぞれの大学アーカイブスの持つ特徴から多くのものを学び、

それをレポートとしてまとめて大学新聞に発表することなどを通して学内での認識を次第に高め、結果として学内に「アーカイブス」を設置することに成功した。

アーカイブス開設に至るまでの学内におけるさらに詳細な事情は割愛するが、端的に言って、この「アーカイブス開設準備プロジェクトチーム」の熱心な活動と、理事会における同窓生理事たちの強い同意によって、「大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）」の設置が実現したのである。

大東アーカイブス設置とその特徴

立ち上げ時における特徴として最初に特筆すべきことは、「大東アーカイブス」という名称を掲げたことであろう。現在の日本の大学アーカイブスには様々な設置形態があり、その業務や特性も多様であるが、「アーカイブス」を正式名称として掲げたのは大学としては初めてであった。これは、編纂室でも資料室でもなく、またあえて文書室でもなく、ともすれば歴史系の博物館と同視されてしまいがちな歴史資料館を、あくまで総合的な意味での「アーカイブス」であるとした一つの表れであった。

二つ目の特徴は、「年史編纂」という過程を経ずに開設されていることである。多くの場合、年史編纂後の資料整理や資料保管の目的から発展してアーカイブスが設置されるケースがほとんどであるが、本学の場合はそうではなかった。後述するが、むしろ十数年後に控えている百周年事業への参与、百年史編纂を見越しての設置であった。



大東文化歴史資料館展示室

しかし、年史編纂というある意味での「下地」あるいは「苦行」の経験を経ないアーカイブスというのは非常に微妙な存在である。資料が未整理であるどころか、紙きれ1枚ない空っぽの部屋が突然「アーカイブス」となるからである。もちろん、年史編纂とアーカイブス業務は本質的に別モノではある。それでも、目の前に何も無い状態から「アーカイブスを始める」というのは想像以上に困難なことである。確かに学内にも学外にも関係資料は多く眠っているし、アーカイブス設置に踏み切ったのはそれらを「収集する」「保存する」「公開する」ことが必要であると学内的に判断されたからであり、創意工夫によっていくらかでもアーカイブス業務の進め様はあるだろう。しかし、基本となる基礎資料を収集するだけでも多大な時間及び予算を必要とし、時には資料提供を依頼する説明だけを延々と繰り返して、その結果徒労に終わることも少なくないというのが実情でもある。

つまりすでに「アーカイブス」という看板を掲げてはいるものの、本格的な「大学アーカイブス」と学内外に認められるためには、今後も相当量の時間と労力とを継続していかねばならない。

機能概要と活動内容

規程上、「大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）」は、学園及び大学を始めとする設置校の歴史に関する調査及び研究並びに校史に係る資料の収集、整理、保存及び公開を行い、もって学園及び設置校の発展に資することを目的とする」と定められている。

規定上に示されている主な活動は、「①校史の調査及び研究、②校史の編纂、③資料の収集、④資料の公開及び展示、⑤展示場の管理及び運営、⑥校史に関する情報の提供、⑦自校史教育への支援、⑧出版物等の編集・刊行、⑨講演会等の実施、⑩その他必要な事業」である。

具体的には、同窓生及び退職者を含む教職員を中心とした学園関係者からの聞き取り調査（インタビュー）や寄贈資料の手続き処理、創設関係者一族の方々への連絡と協力依頼、同窓生による座談会や専門研究者を招聘しての研究会の開催、年2度の企画展の開催、自校史教育への支援協力、そのほか必要に応じて学内外の資料収集整理をコンスタントに行いつつ、上記の活動報告を兼ねたニューズレターを年に2回発行している。

中でも資料寄贈の協力依頼とその対応に関する

業務は、現在の活動の中で非常に重要な位置を占めている。特に創設関係者子孫及び同窓生からは多大な協力を得ており、こうした寄贈資料は沿革を辿るために得がたい貴重な情報を含んでいる可能性があると同時に、「個人文書」を所蔵することはアーカイブスの存在意義にわかりやすく繋がっている。ただし、本学は他私学に比較的多く見られるケースの「カリスマ的」設立者がいるわけではなく、小川平吉、平沼騏一郎、木下成太郎、牧野謙次郎、内田周平等といった官私の立場を超えた多くの知識人たちが大正期の「漢学振興」思想のもとに集って創設した学校であり、私立ではあるが国からの全額補助金を受けて設立されている。そういった複雑な事情を含んでいることから、多数いる創設関係者の資料収集を悉皆的に進めるのは困難であるという事情がある。したがって今後は、他大学アーカイブスとも相互協力しつつ関係資料の収集を進めていくことも考えており、また寄贈資料をある程度選別して受け入れていく必要も出てくるだろう。しかしいずれにせよ、こうした個人文書の重要性は言うまでもなく大学事務文書と並ぶ貴重な資料群である。

そのほか、現在の業務の多くを占めているのが企画展の開催準備である。企画展は現在開催中の第8回企画展「大東文化学院創設をめぐる人々（Ⅳ）大東文化協会初代副会頭 小川平吉」まで全9回行ってきた。テーマは、創設期における学生生活、校歌や校章等のシンボルの誕生、草創期の首脳陣たち等、基本的に創設時期に関するものに偏ってしまっており、テーマに関して「スポーツと大東」など現行学内状況がわかるものを要望する声が多く寄せられているため、現在検討中である。一方、憂慮している課題としては、「大東アーカイブス＝展示室」と考えている関係者が大多数となってしまっていることである。確かに展示は活動を公開したり情報発信したりする上で重要な役割を担っている。しかし、他の大学アーカイブス関係者の多くが考えているように、展示は本質的なアーカイブス業務ではないというのに私も同感である。展示は情報発信方法の一つであるに過ぎない。したがって今後もこういった企画展の開催準備に追われ続けることは望ましい状況ではない。質の良い常設展示に切り替えるなどの工夫をする必要があると考えている。

百年史編纂体制の確立に向けて

今後、大東アーカイブスに求められるものの一



収蔵庫

つは、機能の多様化への試みである。近現代史を中心とした研究面を重視しながら学園史を掘り下げていくことだけでなく、機能的進展とともに学内文書を事務的な観点から収集することも重視せねばならない。そのためにも、「学内文書の保存と活用」が注目され創立以降の存在意義の説明責任が求められている昨今の大学事情において、事務組織全体が学内文書のライフサイクルに責任と関心をもち、学内文書の取り扱いについて学内意識がより現実的に高まることに期待したい。一方で大学アーカイブスの最も重要な機能として学園史を取り扱う以上、アーカイブス専任研究者の配置は極めて合理的な発想であり、機能がより多様化していくために教職員のより強固な相互協力が絶対的に必要である。

2023年に本学は百周年を迎える。通常、百年史の編纂にはおよそ10年の歳月を要するとされる。すなわち本学の場合、少なくとも2013年に年史編纂作業がスタートするということが理想的である。大東アーカイブスは将来的に年史編纂事業への協力、あるいは編纂作業へのシフトが想定されるため、これまでに百年史事前研究会を企画し、2007年7月に西山伸氏（京都大学大学文書館准教授）、2008年2月に村井益男氏（元日本大学教授、日本大学百年史監修者）、2009年7月に折田悦郎氏（九州大学大学文書館教授）の各氏にお越しいただいた。いずれの回も先達の経験に学ぶこと大であったが、特に九州大学が百年史編纂事業を立ち上げた直後であったこともあり、百年史編纂体制の確立、要望、人材の補強、編纂委員会の立ち上げへとといった一連の流れについて、折田氏の報告からは多くの示唆を得ることができた。今後はまず学内体制の確立であるが、アーカイブスとしての機能の充実とともに編纂事業との協調を追究

していかなければならないだろう。

先ごろ大学基準協会が発表した「新大学評価システムガイドブック」(平成23年度以降の大学評価システムの概要)は、「内部質保証」が適切に機能しているかどうかの基準として「基礎データの組織的・継続的収集と管理」「大学沿革史の編纂」「大学文書の保存と活用」等を掲げた。これは大学アーカイブスの存在意義が一般に大きくなりつつあることの表れととらえていいだろう。い

ずれの大学にとっても不可欠の存在としてアーカイブス設置を検討し、その存在を見直すことになるかもしれない。そのためにも、「年史編纂」を経ておらずとも大学アーカイブスは存在しうるし、大東アーカイブスは大学運営上重要な組織たりうることを学内外に示していかなければならないと考えている。

(大東文化歴史資料館)

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	理事	副学長	丸野 俊一	委員	比文院 教授	高野 信治
委員	人環院 教授	新谷 恭明	〃	言文院 教授	恒吉 法海	
〃	文書館 教授	折田 悦郎	〃	先導研 教授	三島 正章	
〃	法 院 准教授	西 英昭	〃	健 七 教 授	山本 和彦	
〃	人環院 教授	稲葉 継雄	〃	熱 七 教 授	黒澤 靖	
〃	数理院 教授	森下 昌紀	〃	図書館 館長	丸野 俊一	
〃	シ情院 教授	倉爪 亮	〃	博物館 館長	松隈 明彦	
〃	芸工院 准教授	北村 賢介	〃	総務部 部長	渡邊 廉	
〃	歯 院 准教授	筑井 徹	〃	図書館 部長	濱崎 修一	
〃	医 院 准教授	倉岡 晃夫				

(2009年12月31日現在)

九州大学大学文書館名簿

館 長	理事	副学長	丸野 俊一	専任教員	百年史 助教	陳 昊
副館長	人環院 教授	新谷 恭明	〃	テクニカルスタッフ	〃	井上美香子
専任教員		教授	折田 悦郎	テクニカルスタッフ	〃	永江由紀子
兼任教員	人文院 教授	佐伯 弘次	兼任事務職員	総務課長		倉田佳奈江
〃	人文院 准教授	山口 輝臣	〃	法令審議室長		江藤 竜美
〃	法 院 教授	植田 信廣	〃	総務第二係長		山下 和成
〃	法 院 教授	熊野 直樹	事務職員			中村 俊郎
〃	比文院 教授	中野 等	事務補佐員			松尾 陳代
〃	シ情院 教授	荒木啓二郎	〃			筑紫 啓子
専任教員	百年史 准教授	藤岡健太郎				

(2009年12月31日現在)

大学文書館日誌抄録 (2009年7月～2009年12月)

- | | |
|---|--|
| 7. 1 (水) 西日本新聞社より電話取材 (附属図書館「音無文庫」の件)。 | 九州大学百年史編集室看板上掲式挙行。 |
| 7. 3 (金) 第4回百年史編集委員会開催 (新谷恭明委員長、植田信廣副委員長、折田悦郎副委員長、藤岡健太郎准教授、陳昊助教出席)。 | 7. 5 (日) 米澤洋氏 (米澤吾亦紅関係資料寄贈者)、大学文書館視察のため来館。 |
| | 7. 8 (水) 元九州大学生協理事、資料調査のため来館 (7月15日、28日、8月19 |

- 日、26日、9月9日、10月28日、11月4日、18日、12月2日も同様。
7. 14 (火) 九州大学病院新外来診療棟開院記念DVD制作ワーキンググループ開催(折田教授出席。7月30日、8月11日、21日も同様)。
7. 15 (水) 柴田篤人文科学研究院長来館(九州大学法文学部85周年/文学部60周年記念事業「はごろもプロジェクト」の件。7月29日、9月2日、17日も同様)。
大学院比較社会文化学府学生、資料調査のため来館(10月8日も同様)。
7. 16 (木) 後小路雅弘人文科学研究院教授、吉川幸作墨彩画調査のため来館(8月11日も同様)。
7. 23 (木) 折田教授、大東文化歴史資料館研究会にて講演(「九州大学大学文書館と百年史編集体制について」。於大東文化大学)。
酒匂一郎大学院法学研究院教授、来館(法学部紹介DVD作成の件)。
7. 27 (月) 濱田耕策人文科学研究院教授より資料寄贈(9月8日、10月5日も同様)。
7. 28 (火) 荒井明夫大東文化大学文学部教授、大学文書館視察のため来館。
8. 3 (月) 長洋一西南学院大学名誉教授、大学文書館視察のため来館。
8. 11 (火) 石井祐子大学院人文科学研究院助教、来館(吉川幸作墨彩画展示会の件。9月4日、14日も同様)。
8. 18 (火) 国際交流推進室より資料調査のため来館(8月21日、12月21日電話照会)。
大学院工学府学生、資料調査のため来館(8月19日、20日も同様)。
9. 1 (火) 第1回百年史編集委員会小委員会開催(新谷委員長、植田副委員長、折田副委員長、藤岡准教授出席)。
松村晶大学院工学研究院教授(九大フィルハーモニー・オーケストラ顧問)来館(同オーケストラ関係資料の件。10月27日、11月19日、12月8日、15日、24日も同様)。
9. 7 (月) 九州大学仏教青年会より来館、資料寄贈。
9. 9 (水) 社団法人沼津法人会より第2代総長
真野文二の件につき照会、資料送付。
9. 10 (木) 川崎武彦・晃氏より資料寄贈。
9. 11 (金) 九州大学病院新外来診療棟開院記念式典(折田教授出席)。
9. 19 (土) 文学部同窓会開催、「箱崎キャンパス旧法文学部関連施設見学会」(折田教授説明)。
9. 29 (火) 六本松地区閉校式(折田教授出席)。
9. 30 (水) 『九州大学大学文書館ニュース』第33号刊行。
10. 1 (木) 産経新聞社より『史淵』の件につき照会、資料送付。
統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻設置検討ワーキンググループ開催(折田教授出席)。
10. 2 (金) 九州大学稲盛財団記念館竣工披露会(折田教授出席)。
10. 5 (月) 「九州大学事務局」看板受領。
名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授、資料調査のため来館。
10. 6 (火) 大学院人文科学研究院教授、資料調査のため来館。
10. 7 (水) 「九大百年の宝物」刊行委員会開催(折田教授出席。11月18日も同様)。
統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻コアチームミーティング開催(折田教授出席)。
10. 9 (金) 「九州大学の歴史」(少人数ゼミ)開講(折田教授)。
10. 13 (火) 中楯潔氏(昭和50年、本学経済学部卒業)より資料受領。
10. 20 (火) 中央図書館より資料受領。
10. 24 (土) 折田教授、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻講演会に参加。
10. 27 (火) 藤井美男大学院経済学研究院教授、来館(経済学部紹介DVD作成の件)。
10. 29 (木) 福岡工業大学講師、資料調査のため来館。
11. 19 (木) NHK福岡放送局より取材のため来館(九大フィルハーモニー・オーケストラ関係資料の件)。
11. 21 (土) 第4回「ホームカミングデイ」の一環として、「九州大学の歩み写真展」、「吉川幸作墨彩画展」開催。
記念絵葉書、2010年カレンダー作成。
11. 30 (月) 大学院比較社会文化研究院教授、資料調査のため来館。

12. 4 (金) 九州大学病院看護部より来館、資料提供。
12. 12 (土) 「九州大学所蔵の史資料—過去・現在・未来—」公開シンポジウム(はごろもプロジェクト)開催(折田教授「総括」)。
12. 13 (日) 九州史学会大会開催(折田教授、「九州帝国大学法文学部の成立」を報告)。
12. 16 (水) 西日本新聞社記者、取材のため来館(杉岡洋一元総長聞き書きの件)。
12. 21 (月) 株式会社麻生より資料調査のため来館。
ソウル大学校より大学文書館視察のため来館。
12. 22 (火) 第2回百年史編集委員会小委員会開催(新谷委員長、植田副委員長、藤岡准教授、陳助教出席)。
塩川郁夫氏来館、資料寄贈。
岩手大学准教授、大学文書館視察のため来館。
総長秘書室より資料受領。
12. 24 (木) 九大フィルハーモニー・オーケストラより資料寄贈。
12. 25 (金) 文学部部局史ワーキンググループ開催(折田教授出席)。

九州大学百年史編集小委員会名簿

委員長	人環院	教授	新谷 恭明	委員	人文院	准教授	山口 輝臣
委員	法 院	教授	植田 信廣	〃	シ情院	教授	荒木啓二郎
〃	文書館	教授	折田 悦郎	〃	法 院	教授	熊野 直樹
〃	比文院	教授	中野 等				(2009年12月31日現在)

九州大学百年史編集室名簿

室長	人環院	教授	新谷 恭明	テクニカルスタッフ	井上美香子
専任教員		准教授	藤岡健太郎	〃	永江由紀子
〃		助教	陳 昊		(2009年12月31日現在)

百年史編集室日誌抄録 (2009年10月～2010年3月)

10. 16 (金) 理学部等教授会議事録撮影(～30日)。
11. 10 (火) 文学部等教授会議事録撮影(～12月1日)。
12. 7 (月) 教育学部・人間環境学研究院等教授会議事録撮影(～25日)。
12. 22 (火) 第2回百年史編集小委員会。
1. 12 (火) 法学部等教授会議事録撮影(～27日)。
2. 1 (月) 経済学部等教授会議事録撮影(～18日)。
3. 5 (金) 法務学府教授会議事録撮影(～8日)。

九州大学大学文書館ニュース 第34号

発行日 2010年3月31日(年2回刊)

編集行 九州大学大学文書館

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

Tel:092-642-2292 Fax:092-642-7646

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷